

はじめての文化昆虫学

一般昆虫学と文化昆虫学の視座の違い: ある昆虫をモチーフとした絵画イメージを題材に

Primer of cultural entomology - difference in viewpoint between general entomology and cultural entomology: explanation with an insect image drawn wrong in morphology and taxonomy

高田 兼太¹⁾

Abstract: In this paper, I tried to explain the difference in viewpoint between general entomology and cultural entomology using an insect image which was drawn wrong in morphology and taxonomy as the explaining material. When some mistakes in morphology or taxonomy were found from the insect image such as an image of a devil Beelzebub (= lord of fly) drawn in Collin de Plancy's Dictionnaire Infernal, such mistakes were interpreted in negative or critical lights toward the morphology from the aspect of general entomology, but it would be better to interpret such mistakes as an issue on studies of the human mind, society and culture as the background in which the image was drawn or as the media which influence human as to "why insect image was drawn wrong?" from the aspect of cultural entomology. Such attitude as cultural entomologist make us enable to expand constructive discussion in studies on cultural entomology.

文化昆虫学は、1980年台に Hogue 博士によって提唱された比較的新しい学問であり、人々に対する昆虫の影響や昆虫に対する人々の認識について調べる研究分野である (Hogue, 1980; Hogue, 1987; 三橋, 2000; 小西, 2003, 2007; 保科, 2013; 高田, 2010, 2013, 2014). 文化昆虫学は、まだ歴史が浅いためか比較的マイナーな学問であるが、人々の自然観を考える上で重要な学問であることから、その研究の発展が期待される。

文化昆虫学は、名前こそ昆虫学とついてはいるが、一般的な昆虫学のように自然科学ではなく、一般的な昆虫学に関する十分な知識を必要とするものの、人文科学に属する。自然科学である一般的な昆虫学は、昆虫の分類や形態、生態、生理などについて研究するので、主な研究対象は昆虫である。それに対して、人文科学である文化昆虫学は、主に抽象的な昆虫が表象する文化事象を調べることで、昆虫に対する人の認識などを解明することが研究テーマであるため、主な研究対象は人である (高田, 2014).

しかしながら、このようにそれぞれの抽象的な視座の違いを記述しても、具象的な例示がなければ、文化昆虫学とその他の一般的な昆虫学との違いを実感できないのが実情ではないだろうか?そこで、本報告文では、ある昆虫をモチーフとした絵画に対する一般的な昆虫学と文化昆虫学の視座の違いを明らかにし、それぞれの分野の特性の違いについて解説したいと思う。

本報告文では、一般的な昆虫学と文化昆虫学の視点の違いを示すために、コラン・ド＝プランシー著の「地獄の辞典」に掲載されているベルゼブブの挿絵を用いる (図 1) (コラン・ド＝プランシー, 1997). ベルゼブブとは、キリスト教の世界における最上級クラスの魔王であり、その意味は「ハエの王」である。その名が示すとおり、ベルゼブブはしばしばハエの姿をしているとされる。つまり、ベルゼブブのイメージが昆虫の姿で描かれるときには、大抵ハエがモチーフなのである。ちなみに、地獄の事典に描かれているベルゼブブの図を用いるのは、本論文のテーマに沿っているからというだけでなく、著作権法の問題で出版社から許諾を得ることなく引用できるからである。というのも、この本の原著が出版されたのが 1818 年であり、著作権の保護期間が切れているためである。

さてこのベルゼブブ＝ハエのイメージは、ある程度の昆虫学の知識があれば、その形態が不自然であることにすぐに気がつくはずである。というのも、ベルゼブブがハエの王でありながらも、翅はハチ目のように 2 対 4 枚なのである。つまり、本来ならば 1 対 2 枚の翅を持つと定義されるハエ目 Diptera の名にそぐわない形態をしている。また、ハエは発達した大あごをもたないが、挿絵に示されたベルゼブブは、甲虫目などにみられるような発達した牙状の大あごをもっている。つまり、

¹⁾ Kenta TAKADA 大阪市西淀川区

昆虫形態学や分類学の観点から見れば、この挿し絵のイメージには、様々な分類グループの昆虫の特徴が入り混じっており、昆虫学的に定義されるハエではないのである。ちなみに、中・後脚が腹部についている点など、昆虫の形態として間違っている箇所も見受けられる。ただし、そういった間違いが見受けられる一方で、例えば附節などは昆虫の特徴をよくつかんでおり、きっちりと描き込まれている箇所もある。

ここで、一般的な昆虫学の視座から生み出される思考は、この生物イメージの形態的特性の是非であって、「このハエをイメージした挿し絵は昆虫形態・分類学的に間違っている」というこのハエのイメージの形態の間違いに対する否定的・批判的見解であろう。これは、一般的な昆虫学の視座からは、きわめて正常な思考であると思われる。一般的な昆虫学では、その分類や形態、生態、生理などについて研究する自然科学である以上、その視座にそったスタンスをとれば、生物イメージの形態的特性にとらわれるだろう。結果としてそれがきわめて常識的な学術的定義や事実と反する場合には、その間違いに対して否定的・批判的態度をとることは自然なことなのかもしれない(もちろん、実際に昆虫を研究するにあたっては、これまでの常識を疑ってかかる目がしばしば必要であると思うが)。つまり、「このハエをイメージした挿し絵は昆虫形態学・分類学的に間違っている」というのは、昆虫学者としての正当なコメントなのである。

しかしながら、人々に対する昆虫の影響を研究する文化昆虫学者の視点はどうかであろうか?文化昆虫学は、冒頭でも述べたように、人文科学である以上、研究対象



図1 コラン・ド＝プランシー著「地獄の事典」に掲載されている魔王ベルゼブブの挿絵(コラン・ド＝プランシー, 1997)。ベルゼブブ＝ハエの王であり、その絵画イメージはハエをモチーフとしているにもかかわらず、翅が2対4枚あることなど昆虫形態学や分類学の観点から誤りがあることに注目。

は昆虫ではなく人である。もし人々に対する昆虫の影響や昆虫に対する人々の認識を問題にするのであれば、この挿し絵を見た際に、昆虫形態学や分類学の観点から正しくない形態であることに気づきながらも、その形態的特性の是非だけにとらわれるべきではないと思われる。研究主体は人である以上、「何故、このように昆虫形態・分類学的に間違った挿し絵が書かれたのか」や「この形態学的に昆虫イメージが、見る側に対してどのような印象を与えるのか」を問う方がよいだろう。例えば、このような絵が書かれた背景には、この挿し絵が書かれた時代や社会では、一般的には人々は昆虫に対して無関心であり、多様な昆虫の種類や分類グループを漠然と区別しているだけであったからではないかとか、あるいは、恐ろしい魔王のイメージを強調するために、色々な昆虫の特徴を組み合わせて描いたのではないかなどと思考を働かせ、可能ならば事実関係を検証していくのである。文化昆虫学の目的に沿って議論を建設的に進めるには、文化事象に表象した昆虫を観察した際に、調査すべき研究主体はその昆虫そのものではなく、その昆虫イメージに係る人、社会、文化であることに留意する必要がある。

文化昆虫学的にこのベルゼブブのイメージを分析するにあたっては、「このハエをイメージした挿し絵は昆虫形態学的に間違っている」と判断して思考を停止させるのではなく、「何故、この挿絵が昆虫形態学的に間違っているのか」や「この形態学的に間違った昆虫イメージが、見る側に対してどのような印象を与えるのか」を問うことで人間社会における昆虫の影響や昆虫に対する人々の認識について探求することができる。また、このような思考を働かせることで、文化昆虫学が大いに寄与しうる人々の自然観の理解へとつながっていくのではないだろうか?もちろん、文化昆虫学の研究者にはそれぞれ個々のスタンスがあり、昆虫学の視点から間違っているという否定的・批判的見解だけを指摘することも一概に間違いとは言いきれない。しかしながら、人文科学としての文化昆虫学ならではの議論の展開を建設的に進めるには、もう少しその間違いに対して余裕を持って臨みつつ疑問を持ったほうがよいと思われる。

本報告文は、高田(2014)の「はじめての文化昆虫学 - みんなで文化昆虫学の研究をしよう!」の続編であり、なかなか理解しづらい一般的な昆虫学と文化昆虫学の視座の違いを感覚的に理解できるように解説を試みたつもりである。本報告文が、文化昆虫学に対する理解につながったようであれば幸いである。また本報告文は、コラン・ド＝プランシー著の「地獄の辞典」に掲載されているベルゼブブの挿絵を文化昆虫学の視座の解説に用いたのであって、実際に細かくこのイメージを分析したわけではない。今後、このベルゼブブのイメージ自体を研究

の対象とした報告文や論文も望まれるところである。

末筆ながら、本報告文を執筆するにあたって貴重なコメントをくださった中峰空博士にお礼申し上げます。

文 献

- Hogue, C. I., 1980. Commentaries in cultural entomology.
1. Definition of cultural entomology. *Entomological news*, 91(2): 33-36
- Hogue, C. L., 1987. Cultural entomology. *Annual Review of Entomology*, 2: 181-199.
- 保科英人, 2013. アキバ系文化昆虫学 ~2次元世界の美少女の虫たちへの想い. 426 pp. 牧歌舎. 兵庫.
- 小西正泰, 2003. “文化昆虫学序説”. 三橋 淳 (編), *昆虫学大事典*. pp. 1103-1104, 朝倉書店, 東京.
- 小西正泰, 2007. 虫と人と本と. 519 pp., 創森社, 大阪.
- コラン・ド＝プランシー (著), 床鍋剛彦 (訳), 1997. *地獄の事典*. 517 pp., 講談社, 東京.
- 三橋 淳, 2000. 文化昆虫学とは. *遺伝*, 54(2): 14-15.
- 高田兼太, 2010. 文化甲虫学: 甲虫の文化昆虫学概説. *甲虫ニュース* 170: 13-18.
- 高田兼太, 2013. 文化昆虫学のススメ. *Nature Study*, 59: 14-15.
- 高田兼太, 2014. はじめての文化昆虫学 - みんなで文化昆虫学の研究をしよう!. *きべりはむし*, 36 (2): 26-27.